

ヒ

ポクラテスを日本で初めて医聖と認識したのは、大槻玄沢であった。一七九六年、玄沢は『解体新書』の原典、クルムス『解剖学図表』の注に、ヒポクラテスは、

解剖学の最も古い考察を、その著作中に散在した形で残しているが、そのなかに『解剖学について』という独立した章がある。(中略)すべての医師中の最高位は、今日においてもなお、まさしく彼のものである。

とある原文を見つけて、次のように超訳した。

専ら格物窮理の学を事とす。尤も人身に就いて躬ら其の体を解きて以て内外諸物を格知し、形器の実理を究尽して而して道を建て教えを設け、統を垂れ業を創め、以て後世に恵を貽す。誠に是れ我が歐羅巴州中医道の開基、解体家の祖師なり。(原漢文)

解剖学を「格物窮理」という朱子学概念で捉え、ヒポクラテスを解剖学すなわち窮理学の祖とする医聖イメージがここから生まれた。

一七九九年、玄沢は聖書に基づく世界史、ゴットフリート『史的年代記』第一巻(二六九八)口絵中のヒポクラテス像により、洋風画家石川大浪にヒポクラテス像を描かせた。玄沢の賛に、

(ヒポクラテス)語りて曰く、凡そ医たる者は宜しく諸病に就いて潜意覃思し、以て其の理を窮むべし。夫れ人身の性に自然の妙道あり。蓋し其の元神意識は一身を主宰し而して能く自ら運動營為す。意の如くならざる無し。医は能く此の理を明弁し、其の自然に随い、以て治を施さば、亦た何の危疑これ有らん。何となれば則ち人身の性は疾病有りと雖も、活動機転有りて、能く自ら癒す。これを謂うに、人身は自然の一大良医なり。医の其の事に従うは猶お臣僕の使令に供するがごとし。(原漢文、後略)

とある。これもまた超訳である。原文はドイツの名医ローレンツ・ハイステルが論文『機械論的内科学説の優越性について』(蘭訳、一七六二)のなかで生気説に立つシュタール派の主張を批判的に紹介した一節である。

彼ら(シュタール派)はヒポクラテスに付会して説いて曰く、医師は何よりもまず、どんな病氣においても、自然(Natur)すなわち生氣(Ziel)自身がどの方向へ、また如何なる道をたどって働きをするのか、よく観察

し考察せねばならない、そして医師は決して油断することなく、それを注視し追跡しなければならない。なぜなら自然(Natur)は最良の侍医(Leibest Arzt)であり、医師(Medicinester)はその従僕(Dienaar)にすぎないからである、と。

玄沢はこのシュタール派の内科学説においても、ヒポクラテスを窮理の師と捉え、「彼ら(シュタール派)を理解できなかった。原文の「自然(Natur)」を「元神」、「生氣(Ziel)」を「意識」と訳したものの、原文にはない人身の自然治癒説を補って理解しようとしたため、「人身は自然の一大良医」と誤訳している。

一八〇七年、玄沢の門人中最高のオランダ語力を有した山村才助は「西士魯乙斯修斯著 古今地理人物志第五卷所載」の「依ト加拉得斯略伝」を訳し、玄沢が修訂した。ここでも二年前のクルムス『解剖学図表』注の翻訳とはほとんど変わらない。「格物窮理」による「解剖の祖」ヒポクラテスである。

依ト加拉得斯は初め専ら格物窮理を研究し、後殊に人身形軀内外造有の物理を窮め、悉く皆解剖し以て実につき、必ず其の蘊奥を竭して止む。是に医流の基本、解剖の祖と為る。(…)遂に全書を著し、医道を創立し、医業大成す。(原漢文)

原文はA.G.ルイシウス(J.uisius)編『総合歴史地理系譜学事典』第五巻(一七三〇)の「ヒポクラテス」項目である。

將軍家侍医桂川家第六代、桂川甫賢(国寧、一七九七〜一八四五)は画才に恵まれ、数多くのヒポクラテス像を描き、蘭文賛を加えた。そのなかで、本展示で初めて公開する一八二四年、二八歳の作品(展示番号12)は蘭文賛と漢文賛をもつ優品である。蘭文賛では、日本で初めてヒポクラテスの箴言「医術は長く、命は短い」を引用し、ヒポクラテスの臨床医学思想を紹介した。典拠は阿姆斯特ダムの医師ランカールの訳になる「ヒポクラテス箴言集」(一七九二)である。漢文賛は山村才助訳「依ト加拉得斯略伝」を踏まえ、ヒポクラテスの臨床医学思想を「格物窮理」の概念で東洋的に解釈したものになっている。

参考文献
緒方富雄『日本におけるヒポクラテス賛美』(日本医事新報社 一九七二)

理を究める

ヒポクラテス流行の起源と格物窮理

松田清

